

鬼眼鏡と鉄屑ぶとり

続旧聞日本橋・その三

長谷川時雨

青空文庫

堀留ほりどめ——現今いまでは堀留町となつてゐるが、日本橋区内の、人形町通りの、大伝馬町二丁目うしろ後の、横にはいつた一角が堀留で、小網町河岸かしの方からの堀留なのか、近い小舟町にゆかりがあるのか、子供だつたわたしに地の理はよく分らなかつたが、あの辺一帯を杉の森とあたしたちは呼んでゐた。

土一升、金一升の土地に、杉の森という名はおかしいようだが、杉の森いなり稲荷の境内は、なかなか広く、表通りは木綿問屋のおわたな大店にかこまれて、社はひっそりしてゐた。そのかみの東国、武蔵の国の、浅草川の河尻かわじりの洲すのなかでも、この一角はもとからの森であつたのかもしれない。ともかく、かなりの太さの杉の木立ちも残つてゐた。

社の裏の方は、細い道があつて、そこには玉やという貸席や、堅田という鳴物師などが住んでゐる艶めなまかしい空気があつた。ずっと前には、この辺も境内であつたのであろう。それゆえか、その細道には名がなくて、小路こうじを出たところの横町がいなり新道というのだつた。以前の葺屋町ふきや、堺町さかいの芝居小屋ざいごへの近道なので、その時分からこの辺も、そんな柔らかない空気の濃厚な場所だつたかもしれない。そしてまた、この杉の森は、享保きやうほうのころ、芝居でする『恋娘こいむすめ昔むかし八丈はちじょう』や『梅雨つゆ小袖こそで昔むかし八丈はちじょう』などの白木屋お駒——

実説では大岡裁判の白子屋お熊の家のあった場所であり、お熊の家は材木商であったのだから、堀留は、深川木場の材木堀のように、材木を溜めておく置場にもなっていたのかも
しれない。

こんな、あぶなつかしい地理より、ここに『江戸名所図絵』がある。これによると、杉の森稻荷社所在地は、新材木町で、社記によれば、相馬将門威を東国に振り、藤原秀郷朝敵誅伐の計策をめぐらし、この神の加護によって将門を亡したので、この地にいたり、喬々たる杉の森に、神像を崇め祀ったのだとある。

そこで、早のみこみに、下町は、江戸時代に埋めたてたのだから、いくら杉の森といつても、その後に植林したのだなどという誤解はなくなるわけだ。だが、稻荷さんといえ、伊勢屋稻荷に犬の糞と、江戸の名物のようにいわれたほど、おいなりさんは江戸時代の流行ものだが、秀郷祀るところの神さまと、どうして代ったのかというと、それにも由縁はあるが、廂をかした稻荷の方へ、杉の森の土地をとられてしまった訳だった。

それは寛正の頃、東国大に早魃、太田道灌江戸城にあつて憂い、この杉の森鎮座の神にお禱りをした験があつて雨降り、百穀大に登る。依て、そのころ、山城国稻荷山をうつつして勧請したというのだが、お末社が幅をきかしてしまつて、道灌が禱つたとい

う神の名も記してない。秀郷祀るところの御本体も置いてない。だが、附記にも、昔杉の木立いと深かりしなりとある。あたしも子供の時分、四月十六日のお祭まつり奠に、杉の木へ寄りかかつて神楽かぐらを見た覚えもあざやかに残っているし、小僧が木の幹にしがみついて、登って見ていたのも覚えていいるから、幾本かは、幾度かの江戸の大火にも、焼け残って芽をふいていたものと思われる。

堀留は、地名辞書によると、堀江、または堀留江、伊勢町堀ともいう、日本橋川の一、北にほり入ること四、五町ばかりとある。

前置きは長くなつたが、そのほとりの大おお店おだなは、夕方早くから店の格子を入れてしまう。この格子は特長のあるいいものだった。一、二寸角の、荒目の格子で、どっしりとした黒光りの蔵造りの、間口の広い店は、壮重なものにさえ見えた。灯ともし火がつけば下の方だけの大戸が下りて、出入口は、引き戸へ潜くぐり口のついたのが一枚おりている。上の方は、暑中でなければ油障子がおろされ、家の中からの灯が赤く、重つたくうつって、墨で描いた屋号の印しるしが大きくうきあがつている。譬たとえば、※丁字星だとか、それが三つ組んでいるのが丁ちよう吟ぎんだとか丁ちよう甚しんだとか——丁字屋甚兵衛を略してよぶ——※やまにだとか、※さつまだとかいうのだった。そうした大店の棟むねつづきで、たてならべた門松などが、師走末の寒月に、

霜に冴えかえつて黒々と見える時は、深山のように町は静まりかえつて、いにしえの、杉の森の寒夜もかくばかりかと思うほど、竦毛おそけの立つひそまりかただった。

いま、ここに、ちよつと出てくる杉本八重さんも、そうした大店のお嫁さんだったのだ。あいにく、幼少ちいさかつたわたしは、美しかったお嫁さんのお八重さんの方を見ないでしまつて、憎らしいおばあさんの方を見たことがあるが、そのお姑しゅうとさんの方も顔にハッキリした記憶が残らないで、話の方が多く頭のお皿のなかに残されている。尤もつとも、ほんとの主題は、この二人の方でなくて別にあるのだから、どうでもよいというものの、事實は決してつくりごとではない。しかも一つ家に姉妹とよばれた人が、お八重さんに同情してよく繰りかえして話してくれたことで、おばあさんの方の話は、その当時あまり有名で、子供のあたしたちは聞くのも煩うるさいものに思っていたほどであった。

明治二十一年ごろ、東京の芝居は、大劇場に、京橋区新富町しんとみの新富座、浅草鳥越の村座、浅草馬道の市村座。歌舞伎座が廿二年に出来るまでは、そのほかに中芝居ちゆうじゆに、本所の寿座ことぶきと本郷の春木座、日本橋蠣かきがら殻町なかしまの中島座と、後に明治座になつた喜昇座きしようだけだった。劇場こやはちいさくとも中島座や寿座の方が、喜昇座より格がよいかにさえ見えた。浅草公園の宮戸座や、駒形の浅草座などは、あとから出来たもので、数はすけなかつた。

そのころの中島座には、現今いまの左団次の伯父さんの中村寿三郎じゅさぶろうや、吉右衛門のお父さんの時蔵ときぞうや、昨年死んだ仁左衛門にざえもんが我当がとうのころや、現今いまの仁左衛門のお父さんの我童がどうや、猿之助えんのすけのお父さんの右田作時代うたさく、みんな、芸も、顔もよい、揃はって覇氣はきのある、若い役者の大役を演じるところだった。そこに、後に工左衛門となつた、市川鬼丸きがんという上方かみがたくだりの若い役者がいて、唐茄子屋とうなすやという、落語にもよくある、若旦那わかしややつしが、馴れぬ唐茄子売をする狂言が当つて、人氣が登つて来たが、坊主頭の女隠居がついていて、こので、大變やかましい取り沙汰になつた。その当時、そうしたみだらごとで、女隠居の名が新聞に出るといふことなどは、この物堅い大店町では、實際じつじたいした内面暴露うちめんばうろくなのであつたが、ものに動じない女隠居は、資産かねのあるにまかせて、堀留ほりどめから蠣殻町かきがらまちまで、最も殷い賑んな人形町にんがたまち通りを、取りまき出入りの者を引きしたがえて、廓くわくのなかを、大尽だいじん客きやくがそぞめかすように、日ごとの芝居茶屋しばいぢや通いで、世間のものを瞳どうもく目めさせたのだった。男妾めかけ——いやな字だが、そんなふうにも書かれた。男地獄おじごく——そんなふうにも言われた。だが、幼いものには、なんのことだかわからないが、憎々しい坊主女ぼくしやめだとは思つた。

このお婆さんが、人もなげな振舞ふりまひいを、当主とうしゅがどうして諫めいさめられないのかといへば、実子ではなかつたのだ。二人生んだ子を、二人まで死なせてしまつて、養子やしやをしたのではあ

り、このおばあさんと、死んだ連つれあい合あひとが、前にいった大長者格の呉服問屋、丁ちようぎん吟ぎんか
らのれんを貰つて、幕末明治のはじめに唐物屋を開いたのが大当りにあたって、問屋まち
に肩をならべ、しかも斬ざん新しんな商業だけに、横浜の取引、外国人との接触などで、派手で
あり暮しむきも傍若無人な、金づかいのあらいものだったのだ。

おばあさんは頭のおさえ手がなく、鼻息のあらいのは、その辺の御内儀とちがって、成
上り者だったのだ。この女は、生れたのが葺屋町——昔の芝居座の気分の残る、芸人の住
居も多く、芳町よしは、ずっとそのまま花柳かりゆう明暗の土地であり、もつと前はもとの吉原もあ
つた場処ではあり、葺屋町は殷賑なところで、その古着屋の娘に生れた、おつやという
のがそのおばあさんの名だったが、役者買いと嫁いじめで、人よんで「鬼眼鏡」と綽あだな名し
た。

その女が若い盛りに、杉の森の裏小路で、長唄のお師匠さんをしていた時分、若い衆で
あつたお店の人たな甚兵衛さんが思いついて夫婦になり、当時の開港場横浜取引の唐物屋にな
つたのだ。この鬼眼鏡に睨にらまれて、三十歳になるかならずで、明治廿二、三年ごろに死ん
だお八重さんは、神田ツ子だった。下駄げたの甲羅問屋の娘さんで、美しいので評判な娘だっ
たのを、鬼眼鏡が好んでもらつたのだが、実家においては継ままはは母ははで苦勞し、そこでは鬼眼鏡

に睨み殺された。と、いうと、おだやかでないが、陰気で、しなやかに撓む、クニヤクニヤした気象の女ひとだったら、どうか我慢も出来たであろうが、お八重さんが、サククリした短所も長所も、江戸ツ子丸出しの気性さがだったのだから、その嫁と姑のやつさもつさが、何ど処こやら、今から見ると時代ばなれがしている。

鬼眼鏡おばさんのおつや、世間でやかましい鬼丸との評判を、嫁にきかせまいとするので、嫁の外出はすっかりとめて、しかも嫁いじめの手は、雪が降る日には、店の者も奥の者も、みんな、およそ雇やといにん人と名のつくものは一人残らず中島座の見物にやり、土間（客席のこと）の柵ますを埋めさせる。そのあとで、風呂にはいりたいといいたす。それも、折角だから、雪風呂にはいりたいといつて、雪を嫁さんに掻かきあつめさせて沸わかささせる。今日のようにガスや、石炭などはない、薪まきで燃す時分にである。

だから、お八重さんは、勝気な血がどうしても鎮しずまらないと、生の好いきい鰹かつおを一本買つて腸わたをぬかせ、丸で煮て、ちよつと箸はしをつけたのを、下の者へさげたりする。あるときは、大丸（有名な呉服店）へ、明石の単衣物ひとえを誂あつちえて出来上つてくると、すぐさま、たとう紙から引出して素肌につっかけ、鬼眼鏡の目をぬすんで、戸棚の中へはいつて昼寝をする。一度でも、好みの衣類に手を通したよろこび——それで堪たんのう能のうしていたのだった。

唐物屋は——小売店の唐物屋は、舶来化粧品から雜貨類すべてを揃えて、西洋小間物雜貨商などのだが、問屋はその他、金かなきん中やフランネルの布地きれじも主おもであり、その頃の、どの店でも見ない、大きな、木箱に、ハガネのベルトをした太ふとびよう鋏はさのうってある、火の番小屋ほどもあるかと思われる容積の荷箱が運びこまれて、棟の高い納屋を広く持ち、空あきばこ函こをあつかう箱屋までがあつて、早くから瓦斯ガスやアーク燈を、荷揚げ、荷おろしの広場に紫つぽく輝かしたりした。構えも大きく広やかだった。

それにつづいて、見かけは唐物問屋ほど派手ではないが、鉄物——古鉄もあつかう問屋がめざましく、揚ようよう々ようとしていた。洋銀ドル相場での儲もうけは、商業とともに投機的で、鉄物屋の方が肌合が荒かつたかともおもわれる。いってみれば唐物屋はインテリくさく、鉄商は鉄火だった。

この、鬼眼鏡おつやを学ぶのが、鉄屑かなくそぶと肥おりの大内儀おおかみさんであつたのだ。

前承のおおかめさんは、たしかに鬼眼鏡の有名な遊興によつて、発奮したといつてもよいのは、彼女も八丁堀の古着やの娘であつたし、俺も働いて資産しんだいをつくつたのだという威張りいと、亭主が、横浜まで裸で、通し駕籠かごにのつて往来ゆききしたというほど野蠻で、相場上手

だったので運をつかんだのだが、理想が鬼眼鏡だから、自分もそうした人気者を鼻^{ひいき}にしようとした。

「おい、この子は、どこの娘^こだ。」

「あたいの娘だよ。」

「嘘^{うそ}言え、手めえの面にきいてみる。」

「ほんだよ、末の娘だあね。」

「ごらんじゃい、まあ！ あんまり乱暴におはなし遊ばすので、このお娘^こが、はは様のお顔を、びつくりしてごろうじる——」

まったくわたしは吃^{びつくり}驚して！ 母などとは、きくもいまわしい、汚ない、黒いダブダブ女^{みづ}を瞪^みめていた。

ここで、わたしという、あんぽんたん女史^と十歳^{とお}か十一歳の、ぼんやりした映像をお目にかける。厳しい祖母の家庭訓に、こんな会話の場所へ連れだされても、みじろぎもしないで坐っているのだったが、鉄^{かなくそ}屑^せぶとりのおおかみさんの死んだ末っ子と、おなじ年^{とし}齢^{れい}だというので、ちよつと遊んだこともあったので、思い出してしかたがないから、浅草^{かんの}観^{かん}

音様への参詣にお連れ申したい、かしてくれと申込まれて、いやいやながら、親のいつけにより伴われて来たのだが、そこは観音様ではなく、芝居がえりの、料理屋の座敷だった。

あたしたちが座蒲団に乗ると、すぐ間もなく、テラテラした、金壺眼で、すこし出額の、黒赤い顔の男——子供には、女も男も老人に見えたが、中年人だったのかもしれない——柔らかい袴を穿いて、黒い手提げ袋をさげてはいつてくると、座蒲団の上に突つたつたまま、あんぽんたんを見てそういつたのだった。

と、大女房さんが、衣紋をつきあげながら甘つたれて言つたのだ。あたいの娘だと——あんぽんたんの憤懣は、それつきり、ものを食べなくなつてしまつたのだが、大人はそんな感情がわかるほど、しつとりとしていなかつた。乾ききつた人たちだつた。

青黄ろい、横皺の多い、小さな体で、顔が、ばかに大きく長目な、背中をわざと丸くするような姿態をする、髪の毛が一本ならべて嘗めたような、おおかめさんのお供をしてきた大番頭の細君は、御殿づとめをしたという、大家の女房さんたちのするような、ごらんじやい言葉で、ねちねちとものをいつて、その場をとりなすのだった。

「ほんとおめえの娘なら、亭主の子じやあねえな、おれんどこへよこしな、みつちり芸

をしこんで——」

「芸者に売るんだらう。」

「まあまあ、何をおつしやるやら、以前のようには、茂々お目にかかれませぬに——」

そういう大番頭夫人の顔を、いつぞや、見世ものでみた、※々《ひひ》のような顔だと、あんぼんたんは見ているうちに気味が悪くなった。

「しげしげお目にかかるんじやあ、おらあ、生きてるより死んだ方がいい。」

「あんな、もう、憎て口を——」

大番頭夫人は口で憎がるが、おおかめさんは機嫌よくお杯口を重ねて、お酌をしたり、してもらったりしている。

「次の狂言には、何をやるのさ、お前さん。」

「八百屋の婆あだよ。」

「まあね、さぞ、およろしかろうね。」

大番頭夫人は、小さな丸鬚とはつりあわない、四分玉の珊瑚珠の金脚で、鬚の根を掻きながらいった。

「厭味な婆あにすりやあいんだから、よくなくってどうするんだ。手近に、そのままの

がいるじゃあねえか。そつくりそのまま真似ときやあ、すむんだ。」

ぼんやりと憤っているあんぼんたんの顔を見て、あごで、そら、そこにね、というふうにおおかめさんの方を、しやくつて示しながら、その男は上機嫌に笑った。もの言いより賤いやしくない態度で、鋭い毒舌だった。

「おい、おさつさん、八百屋が出るようだったら、衣類きものをかりるぜ、今着ているのを、そのままでいいや。」
と、猪首いしびで、抜き衣紋えもんをするかたちを、真似て見せた。

あたしは、この肥ふとつちよのおおかめさんに、おさつさんという名があるのを、不思議な気もちできいていた。

——この、不思議な会話を、後日思出したときに、幼いころの、この謎なぞのようなことばが、やつと解けたのだった。八百屋の婆とは『心中しんじゅう宵庚申よいごうしん』の八百屋半兵衛の養母の役でいろぶかい姑しゅうとばば、婆あのことであつたのだ。その時の、袴はかまをはいた、色の黒い中年男は、中村勘五郎といった皮肉屋で、浅草今戸に書画や骨董こつどうの店を、後になつて出しりした、秀鶴しゅうかく仲蔵なかざうを継ぐはずの俳優やくしやだった。彼は、鼻肩ひいきの女客を反そらさないようにしながらも、なかなか傲岸ごうがんで、しやれのめしていたのだった。

もし、この女客——八百屋半兵衛の養母の拵らえ、着附けを、すこし委しく述べると、黒縹子の襟のかかった南部ちりめん、もしくは、そのころは小紋更紗も流行っていた。友禅の長襦袢のこともあったが、売出されたばかりの、ごく薄手の上等の英ネルの赤いのを胴にした半じゆばんへ水色っぽい友禅ちりめんの袖をつけて、袷仕立にした腰巻ぎ——塵よけともいうが、白や、水浅黄のゴリゴリした浜ちりめんの、湯巻きのこともある。黒ちりめん三つ紋の羽織、紋は今日日とおなじ七ト位だった。そのあとで、女でも一寸一ト位まで大きくなって、またあとでもどりしたのだ。しかし、そのまた前まで、ずっと昔から大きいのがつづいていたのだったようだ。

おおかめさんの体重は、年をとっていたから、十八、九貫ぐらいだったろうが、そのかわり皮膚が拵がつて、どたりとしていたから、お腹の幅や、長く垂れた乳房の容積などは、それはたいしたものだった。鼠ちりめんへ宝づくしを細かく縫にしたじゆばんの半襟は、一ぱいにひろがつて藤色の裏襟が外をのぞいている。その間からお酒に胸焼けのしている皮がはみだすのを、招き猫のような手附きで話をしながら、時々その手で、衣紋を押上げるのだった。羽織の紐が門のように、一文字に胸を渡っていた。

おおかめさんの顔で目立つのは、額と頬つぺたの広々とした面積で、高く盛上っている。

口も反つて分厚な、大きな唇をもつていた。そのかわりに、謙遜すぎるのが鼻と眼だった。眼は小さいばかりでなく、睫毛が、まくれこんでいるので——トラホームだったのかもしれない——小さいばかりでなく、白っぽく、光りがなくて、そのくせ怖かった。まわりからくる体つきの愛嬌で、ニコニコしているように見えたが、眼は決して笑っていないかったその眼の無愛想をおぎなつて、鼻が親しみぶかかった。お団子を半分にして、それを拇指でおしつけたように、押しつけたところがピタンとしている。大きな鼻の穴が、豎に二つ柿のたねをならべたように上をむいている。

頭は、薄い毛の鬢を張つて、細く前髪をとつて——この時分、年配者は結上げてから前髪の元結をきつてしまつて、鬢の毛と一緒に束髪みたいに搔いていたのだが——鼈甲の櫛、丸鬘の手がらは、水色のこともあれば藍色のこともあつた。プラチナの細い上へ、大きく紫っぽいダイヤが、総彫刻の金指輪のとなりにあつて、そぐわない手の上で、迷惑そうに光つていた。

小紋更紗といえ、この、中村勘五郎の息子に、銀之助という少年役者が、その日、芝居の見物をしていた棧敷の裏へ挨拶に来ていた。そのころの劇場は、当今の一階椅子席——一等席から二等席の方へかけて、ずっと細長く、豎に半間はばよりすこしゆるめに、長

い長い溝になつていて、畳がずっと敷きつめてある。それが両花道のきわまでつづき、またそれを一コマずつに、細い棧木で仕切つていつて、一コマが、およそ一間の四分の一に仕切られて、その中に四つ、または五枚の座蒲団が敷いてある。これが芝居道でいう一間——一桝なので、場席を一間とつてくれ、二間ほしいなどというのだった。二間三間と陣どつて、ゆつくりはいりたければ、代金さえ支払えば定員だけはいらなくともよいのだし、そのかわりに子供も交せて六人はいつている窮屈なものもある。それを一桝とれとか二桝ともいつた。棧木は——ツマリ仕切りは、出方——劇場員によつて取りはずしてくるから、連れであることは桝を見ればわかるのだった。役者の連中は、この長い豎の溝を貫ぬいて幾本もとると、夏なぞは、その役者の揃いの浴衣を着て、役者の紋のついつている団扇を一人ひとりが持つていたので、華やかでもあり、宣伝としても効果的だった。花道の外になる両側は三段、もしくは四段の雛段式に場席がなつていて、一桝くぎりはおなじだが、これは舞台へ斜めにむかう工合で、おなじ豎に流れていながら横にならんである感じでならば、一段ごとに緋の毛氈がかかつていた。もとより、その雛段にも連中は並んだから、魚河岸とか新場とか、大根河岸とか、吉原や、各地の盛り場の連中見物、その他、水魚連とか、六二連、見連といつた、見巧者、芝居ずきの集まつた、権

威ある連中の来た時など、祝儀をもらつた出方が、花道に並んでその連中に見物の礼を述べたり、手打てうちをしたりして賑わしかつた。

この雛段を、下から、新高しんだか、高土間たかどま、棧敷さじきととなえ、二階にあるのは二階棧敷、正面の二階棧敷の頭の上と、下の棧敷の頭の上に、花のれんがさがり、提灯ちようちんがつるされるので、劇場内は、ぐるりと一目ひとめに、舞台の場面とおなじ調子をつくりだすので、見ている観客までがその場の、一風景につかわれる見物人にもなるので、浮立うりだてつてくる心理が、とても、こくのある甘さとなつて、演じる役者もみるものも、とうぜんと酔っぱらつたのではないかと思うし、昔の芝居のおもしろさは、こんなところにあつたのだなということが、今になつて思われるのだつた。

そうした棧敷の後の板戸を、そつと引き開けるものがあつた。舞台上に夢中になつている女たちは気がつかなくなつたが、ちいさな、あんぼんたんは、透間風すきまかぜが、おかつぱのまんなかにあけた、ちいさな中剃りなかずや、じじつ毛のある頸筋くびすじに冷たくあつたので振りかえると、つくなんでいた男が、手のついた青い籠かごの上へ、手拭袋包てぬぐいをのせ、手拭と菓子籠の間へ、ヒラヒラと、巾はば一、二厘の、丈五たけ卜ぶばかりの赤や青のピラピラのさがつた樂屋がくや

簪かんざしを十本ばかりはさんだのを、棧敷の中へ押入れるようにしていた。

と、おとなたちも気がついて、振返えると、また二、三寸板戸の開きがひろげられて、そこへ、他の男衆おとこしゆうを供につれた銀之助が来たのだった。あの黒い、眼の鋭い、お出額でこの役者の子だとあとでできたのだが、この子は葱ねぎのような青白きで、あんぼんたんが覚えているのは、薄青い若草色の羽織と、薄柿色かきの着もので、羽織とおなじ色の下着を二枚重ねて着ていた。あたしが家うちへおくられて帰るときに、その青籠入のお菓子と、手拭と、楽屋かんざしをそっくりつけてよこしたので、家うちのものがいろいろその日の様子をきいたおり、その葱のような役者が、この贈りものをもってきたのだといったらば、それが中村銀之助という子役だと、母たちがいつていた。

簪かんざしは鶴がついているのと、銀杏いちょうの葉とのがあって、ピラピラに、舞鶴まいづるや、と役者の屋号を書いたのと、勘五郎としたのと、銀之助と書いたのが交まじっていた。手拭袋てふきぶくろのもようつと色とが、銀之助が着ていた着物とおなじなので、思いだして話すと、これは、鶴菱つるびしというので、舞鶴屋の紋でもあると祖母がおしえてくれた。そしてその着物のことを、染めさせた小紋であろうといつていたので覚えてしまったのだった。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鬼眼鏡と鉄屑ぶとり

続旧聞日本橋・その三

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 長谷川時雨

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>